

悪夢蘇る「共謀罪」法成立

無職 大石弘子

(九十二、東京都世田谷区)

「共謀罪」法が可決・成立した十五日、テレビはイギリスのビル火災を映していた。治安維持法の恐怖と空襲の炎の夜が蘇る。

その日、私は若いお母さんに戦争体験を話すことになっていった。五十七年前、岸内閣の安保改定に日本史上最大の抗議デモが行われ樺美智子さんが死んだ日でもある。昭和二十年の日記には日夜絶えぬ空襲、人々の死、戦災孤児らの餓死寸前の姿を記録している。

国が敗れ初めて他の生き方があるのを知った。教育勅語、治安維持法から解き放たれ「戦は嫌だ」と言うことを許された。「死ぬこと」のみ向き合っていた国民に、「生きる」という開かれた世界、自分の命が戻った。「不戦」を口にできまで、ど

れほどの命が失われたか、忘れないでくださいと私はお母さんたちに訴える。

安倍政権の目指す未来が分からない。皇国主義をちらめかし、近隣国からの危機を掻き立てて軍事強化の要を国民の心に詰め込もうとし、あえて騒乱地に部隊を派遣し、大学・科学者を軍学共同へ誘わんとし、兵器・原発を他国に売り込もうとし、五輪に事寄せて、共謀罪法をつくる政権の目指す未来が分からない。国会では、共産党が野党の中軸となり正論を述べた。さぞかし目障りだろう。治安維持法で共産主義者を極刑に処した過去がある。共謀罪はお誂え向きの対処法となるかもしれない。

悲惨の果ての屍の山から齎された「平和憲法九条」を、安倍政権が変えようとしている。これに共謀罪法を重ねれば、向かうところ敵なしとほくそ笑んでいるのだろうか。戦争体験老人の脳裏に悪夢が渦巻いて止まない。